学校物語（国吉小の巻１０）

――久貝源一の登場――

余木令一

田舎の、それもあまり広くない村にたかだか六、七百メートルの間をおいて学校が二つ存在することは不経済であり、教育の面からも、町政の上からも好ましいことではなかつた。ましてや悪い意味での対立観念が次第にふかまつていくに至つては、南北両校の統合は既に時期の問題となつていたとみるべきかもしれない。

両校の統合問題に深い関心をよせていたのは、前々回のこの欄で紹介した郡役所の学事係長吉野一松氏であつた。吉野氏は前途を見通して町当局に対し熱心に統合を勧めた。しかし現実の上にたつてこれをみるならば、町としてはとても統合にふみきれるものではなかつた。否、かえつて生徒間の派閥争いに油をそそぐような結果を招来するものと判断していたので、吉野氏の説に耳をかすものはほとんどいなかつた。それでも吉野氏はくじけなかつた。しつこく食いさがつて時勢はそのようなけちくさい考えを許すものではないと説いてまわつた。

一折も折、町内では久貝源一という人が頭再をあらわしはじめていた。久貝氏は吉野氏の熱意に動かされ次第に会併論にかたむいていつた。町長をさそい、有力者を説き伏せ、ついに町会をして同意せしめることに成功した。明治三十二年初頭の頃である。前にもしばしば述べたような当時の状況としては、これまでこぎつけるのはなみたいていの苦労ではなかつたろうし、また同時に決然たる態度を持つて事にのぞんだであろうことも推察される。

これで懸案の統合は前向きの姿勢をとることになつた。これをたとえるならば統合劇の主役を演じたのは久貝源一氏であり、その演出にあたつたのは吉野一松氏であつた。久貝氏と吉野氏とはこれ以後、肝胆相てらす仲となつた。

久貝源一氏は後に国吉町長となり、まがりかどにさしかかつた町を正しい方向にみちびいていつた人で、その功績は高く評価されてよい筈だ。氏はまた県会議員にもなり、強大な組織をもつて鳴る当時の「以文会」を向うにまわし、劣勢とはいえ反対党の陣頭に立ち阿修羅のように奮戦した政治家としても、夷隅郡に久貝源一ありとしてその声名をほしいままにした人でもあつた。

美しいアゴヒゲを胸のなかばまで房々とたらし、村の夫子然とした温容は誰にも好感をあたえずにはおかなかつたが、時に利あらず選挙にも敗戦をかさねその晩年は淋しい余生を送つたようである。時の流れにおもねない英傑の末路は、えてして、かくの如くであるが、いつの世にかまた、サンとして蹶やく光に照らし出されることもあるであろう。氏よ、以つて冥すべし。

ああ！